討することにより Fc-receptor-mediated, cell destruction 機序に基づく脾・網内系機能測定法の臨床的応用価値を追求した．今回は2～3の方法論検討と臨床応用とその結果につき報告した．

方法：H-R と N-R は ^{51}Cr で標識し D-R は ^{99m}Tc で標識した．各赤血球は全血で 5 ml (Ht 30～40%) 標識に使用する RI 量は，^{51}Cr: ^{99m}Tc=100 μCi: 300 μCi 全投与量が ^{51}Cr 300 μCi, ^{99m}Tc 900 μCi となるように使用した．加温障害は 49°C, Cr-45 分 Tc-15 分，NEM 処理は RBC 1 ml 当たり 10 m Mol，抗 D 感作は 50 μg/ml RBC, 25 μg/ml RBC の 2 種類を（各 D_2-R, D_1-R) 用い Ht 45～50% に調整して 37°C 30 分間孵置した．まず ^{51}Cr-H-R と ^{99m}Tc-D_2-R を同時投与し次いで消失した後 ^{51}Cr-N-R と ^{99m}Tc-D_1-R を投与した．投与後より経時的に血液を採取し放射活性を測定して各血中消失曲線を得ると同時に脾・肝部に円筒指向性検出器で Tc-Cr につき臓器放射図を求め血中曲線と対応のもとにこれを補間および t=0 へ外挿した．Cr-H-R の t=0 減少勾配と脾血流量 λf とし Cr-N-R, Tc-D_1, D_2-R の t=0 の減少勾配の対 λf 比を緩徐循環相への分流比，β_2 とした，血中消失曲線を biexponential に解析して，0 線との間に占める面積の逆数の対 λf 比を脾における除去効率 ER とした．

結果：各障害血球の β_2 と ER は，D_2-R, D_1-R, N-R の順に小さくなり，それぞれについては β_2 と ER との間に正相関があり，赤血球の脾内緩徐比が一次フィルター効果として除去効率の促進要因となる点において D-R は N-R と同様であったが，自己免疫性溶血貧や ITP の一部症例，ことに γ-glob 大量療奏効例で ER の減少を認め D-R, Clearance の特異性も示唆された．

54. 乳癌と原発性副甲状腺機能亢進症を合併した骨 Paget 病の一症例

日野　恵　滋野　長平　山本　逸雄
森田　陸司　鳥塚　莞爾　（京大・放核）
児玉　宏　（児玉クリニック）
土光　茂治　（京都市立・放）

最近われわれは，乳癌と原発性副甲状腺機能亢進症を合併した骨 Paget 病の一症例を経験したので報告する．症例は69歳女性，腰痛を主訴として来院，現病歴としては，5年程前より軽度の腰痛を覚えるも放置，昭和57年9月，検診にて乳癌と診断され根治手術を受ける．この時，入院中に高カルシウム血症を指摘される．その後も腰痛持続し，昭和58年3月，骨シンチにて右骨盤骨の異常を指摘され，本院入院となる．入院時検査では，ALP 155/U/L Ca 11.5 mg/dl, P 2.7 mg/dl と異常値を示し，PTH 2.0 ng/ml, 1.25 $(OH)_2$ D 94.8 pg/ml と高値，%TRP 72% と低値であった．骨シンチでは，右骨盤骨に ^{99m}Tc-MDP の異常集積が認められ，骨 X 線写真では，腸骨～恥骨に，骨梁の粗造化と骨硬化像が認められた．同部位からの生検にて骨 Paget 病に特徴的なモザイク構造が観察された．また，頸部 CT, ECHO にて，甲状腺右葉後部に，φ 5 mm の腫大した副甲状腺が認められた．以上の所見より，本症例は原発性副甲状腺機能亢進症を合併した骨 Paget 症と診断した．

われわれは過去7年間に9例の骨 Paget 病を経験したが，9例中5例が骨シンチで偶然異常を指摘されており，本症患の発見と診断に対し，骨シンチの有用性が示唆された．また，合併症としては9例中3例に心疾患が認められた．本症例のように原発性副甲状腺本機能亢進症との合併は，わが国ではまだ報告がみられないが，Macintyre らは両者の合併率が高いことを指摘している．本症例でも原発性副甲状腺機能亢進症による PTH, 1.25 $(OH)_2$ D の高値と，骨 Paget 病による骨代謝の異常亢進が認められ，両者の間に何らかの関連性のある可能性が示唆された．

55. 骨シンチで肺，心筋，胃などに異常分布を示した悪性リンパ腫の一症例

根来　伸夫　生野　善康　（大市大・一内）
沢　久　波多　信　越智　宏暢
浜田　国雄　（同・放）
嶋崎　昌義　（同・病理）
寺柿　政和　砂田　一郎　多田　昭雄
（多根病院）

基礎疾患として悪性リンパ腫があり，それに伴う高 Ca 血症のためと思われる心筋，肺，胃，腎への転移性石灰化に ^{99m}Tc-MDP が集積した稀な症例を経験し，骨シンチグラフィがその検出に有用であったので剖見所見とあわせて報告した．

症例は，56歳の男性で，主訴は全身倦怠感である．現病歴：咳と全身リンパ節腫脹が出現し，生検にて Non Hodikin lymphoma と診断された．入院時現症：著明な

Presented by Medical*Online